

# 飢饉の歴史地理学的研究

—インドを中心として [2] — —日本の事例—

二 木 敏 篤 ・ 井手口 敬

(1996年5月13日受理)

## 4 飢饉の歴史 (2)

〔わが国の飢饉史〕 崇神天皇(西暦紀元200年前後)以前の飢饉に関しては不明な点が多い。しかし、『日本書紀』、『続日本紀』などには多くの飢饉の記録が記述されている。崇神天皇の「五年に、国内に疾疫多くして、民死亡れる者有りて、且大半ぎなむとす<sup>(1)</sup>。六年に、百姓流離へぬ。或は背叛く者あり<sup>(2)</sup>」と、また、仁徳天皇の「即ち知りぬ、五穀登らずして、百姓窮乏しからむ<sup>(3)</sup>」そして欽明天皇二十八年(567)にも「二十八年に、郡国、大水いでて飢ゑたり。或は人相喰ふ。傍の郡の穀を轉びて相救へり<sup>(4)</sup>」。推古天皇三十一年には「霖雨して大きに水あり、五穀登らず<sup>(5)</sup>」さらに3年後に「是年、三月より七月に至るまでに、霖雨ふる。天下、大きに飢う。老は草の根を食ひて、道の垂に死ぬ。幼は乳を含みて、母子共に死ぬ。又強盜竊盜、並に大きに起りて、止むべからず<sup>(6)</sup>」と『日本書紀』に書かれ、この年正月に桃李花咲き、三月に霜降り、六月雪降り、三月より七月にかけて霖雨が多く、天下大いに飢えたが、翌年も五穀が実らず飢饉となった。

その後も、天武天皇の白鳳五年(677)六月に「是の夏に、大きに旱す。使を四方に遣して幣帛を捧げて、諸の神祇に祈らしむ。…然れども雨ふらず。是に由りて、五穀登らず。百姓飢ゑす<sup>(7)</sup>」と、さらに十一年(683)「霜降り、亦大風ふきて、五穀登らず<sup>(8)</sup>」と書かれている。持統天皇の朱鳥六年(692)にも大水による飢饉があったようである。次いで『続日本紀』の文武天皇の大寶二年(702)の頃に、三月に因幡・伯耆・隱岐の三国に蝗害があり<sup>(9)</sup>、八月には駿河・下総の二国には大風により<sup>(10)</sup>、九月に「駿河・伊豆・下総・備中・阿波の五国、飢ゑぬ。使いを遣して存恤せしむ<sup>(11)</sup>」とあり、慶雲元年(704)讃岐・武蔵に<sup>(12)</sup>、二年夏には干害があり<sup>(13)</sup>、三年には河内・摂津・出雲・安芸・紀伊・讃岐・伊予が飢饉となった<sup>(14)</sup>。聖武天皇の神亀五年(728)、天平四年(732)、同九年については「大倭・伊豆・若狭の三国の飢ゑ疫める百姓に賑

給す<sup>(15)</sup>」と書かれ、同拾九年には「去年亢旱なるを以て、年穀稔らず。…大倭・河内・摂津・近江・伊勢・志摩・丹波・出雲・播磨・美作・備前・備中・紀伊・淡路・讃岐の十五国飢饉ゑぬ。因て賑恤を加ふ<sup>(16)</sup>」。二十年には河内・出雲と近江・播磨の国で、天平勝宝元年には「下総国旱し、蝗ありて飢饉ゑぬ。これに賑給す<sup>(17)</sup>」と記されている。孝謙天皇の天平勝宝二年（750）には備前国で、淳仁天皇の天平宝字四年（760）に上野国、同六年四月には遠江と尾張、五月には京師と畿内と伊勢・近江・美濃・若狭・越前で、さらに石見・備前でも飢饉があったと報じている。称徳天皇の天平神護元年（765）二月「和泉・山背・石見・美作・紀伊・讃岐・淡路・壱岐等の国飢ゑぬ。並に賑恤を加ふ<sup>(18)</sup>」更に相模・下野・伊予・隠伎が、三月には伊賀・出雲・左右京・上野・尾張・参河・播磨・石見・阿波で<sup>(19)</sup>、四月には美濃・越中・能登・常陸・武蔵・駿河<sup>(20)</sup>、六月には甲斐・備後<sup>(21)</sup>と、この年は飢饉・干害の報告があった国の数が33国に及んでいる。同二年には淡路・石見・和泉・河内<sup>(22)</sup>の他に「日向・大隅・薩摩の三国、大風ふきて、桑・麻損ひ尽けり。詔して柵戸の調庸を収むること勿からしめたまふ<sup>(23)</sup>」と。神護景雲元年（767）には「淡路国頻に旱して種稲に乏し。播磨国加古・印南等の郡の稲四万束を転して百姓に出挙す<sup>(24)</sup>」るが、淡路では飢饉となっている。この他に山背にも飢えが記されている。同三年に下総・志摩で飢饉が生じている<sup>(25)</sup>。光仁天皇の宝亀三年（772）に尾張国で、同五年に京師・尾張・讃岐・参河・能登・志摩・飛驒・伊予・若狭・土左などにも飢饉があった<sup>(26)</sup>。六年には参河・信濃・丹後・和泉国<sup>(27)</sup>、八年には讃岐・隠伎・伯耆国、十一年に駿河・伊豆国で、天応元年（781）には下総国でも飢饉があった。桓武天皇の延暦元年（782）には武蔵・淡路・土左国、四年に周防に飢饉と疫病が、出羽・丹波・遠江・下総・常陸・能登などの国で大風により飢饉が起こっている。美濃・尾張・参河でも五穀が実らず飢えるものが多かった。八年には伊賀・安房・紀伊・伊勢・志摩・下野・美作・備後などでも飢饉があったようである。九年は伯耆・紀伊・淡路・参河・飛驒・美作・備前・阿波・和泉・遠江・近江・美濃・上野・丹後・播磨・備中で飢饉があり、天皇は「順調な気候が訪れず、日照りが災いとなって田畑は荒れ、農地の多くは荒廃している。豊作と不作は巡りあわせと言っても、責任は深く朕にある。今聞くところでは、京と畿内の不作は畿外の国よりもひどく、その上、疫病や飢饉に苦しんでいる者が多いという。それで、左右京と畿内五か国の今年の田租を免除して窮状を和らげたいと思う<sup>(28)</sup>」と詔されている。十年にも日向・豊後・大隅、それに紀伊でも飢饉が起こっている。十七年に阿波国、十八年にも大和・河内など十七カ国に飢饉が相次いで発生した。この他にも数多くの飢饉が起こっているが、資料の散逸したものも多いと思われる。

以上は『日本書紀』・『続日本紀』の記述を引用したものである。この両古典に記載された飢饉は主要なものに限られるのではないかと思われるが、崇神天皇から桓武天皇の延暦十八年までの凡そ600年間に記録された40回の飢饉から15年間に1回の割で発生した計算になる。最近一千年の我が国の十六大飢饉についての記述が中島の『飢饉日本史』にみえるが、以下ふるいものから順に採り上げて概略する。

- ① 安徳天皇 治承四年(1180)養和元年(1181) この大飢饉は鴨長明の『方丈記』に「又養和のころとか、久しくなりておぼえず。二年が間、世中飢渴して、あさましき事侍りき。或は春夏ひでり、或は秋、大風、洪水など、よからぬ事どもうち続き、五穀ことごとくならず。むなしく春かへし、夏植うるいとなみありて、秋刈り冬をさむるそめきはなし。是によりて国々の民、或は地をすてて境をいで、或は家を忘れて山にすむ。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれど、更に其のしるしなし。京のならひ、なにわざにつけても、みな、もとは田舎をこそ頼めるに、絶えて上るものなければ、さのみやはみさをもつくりあへん。念じわびつつ、さまざまの財物かたはしより捨つるがごとくすれども、更に目見たつる人なし。たまたまかふるものは、金を軽くし、粟を重くす。乞食路のほとりに多く、憂へ悲しむ声耳に満てり。前の年、かくの如く、からうして暮れぬ。あくる年は立ち直るべきかと思ふほどに、あまりさへ疫癘うちそひて、まささまに跡形なし。世人みなけいしぬれば、日を経つつきはまりゆくさま、少水の魚のたとへにかなへり。果てには、笠うち着、足ひきつつみ、よろしき姿したるもの、ひたすらに家ごとに乞ひ歩く。かくわびしれたるものどもの、歩くかと思れば、すなはち倒れ伏しぬ。築地のつら、道のほとりに飢え死ぬるものたぐひ、数も不知。取り捨つるわざも知らねば、くさき香世界に充ち満ちて、変りゆくかたち、ありさま、目をあてられぬこと多かり」と、さらに、「いとあはれなる事も侍りき。さがたき妻、をともちたるものは、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。その故は、わが身は次にして、人をいたはしく思ふあひだに、まれまれ得たる食物をも、かれに譲るによりてなり。されば、親子あるものは、定まれる事にて、親ぞ先立ちける。又母の命つきたるを不知して、いとけなき子の、なき乳をすひつつ臥せるなどもありけり<sup>(29)</sup>」とその飢饉の惨状を語っている。なお、この頃書かれた『地獄草紙』、『餓鬼草紙』にもこの飢饉の状況が描かれており、芥川龍之介の『羅生門』もこの飢饉での都の悲惨な様を描いた作品である。平家滅亡の一つの原因がこの飢饉であったといわれる。

- ② 後堀川天皇 寛喜二～三年(1230～31) 大冷害が原因。

- ③ 後嵯峨天皇 正元元年～文応元年（1259～60） 大冷害が原因。
- ④ 称光天皇 応永二十七～二十八年（1420～21） 大旱魃と戦乱が原因。「道きん相枕す、日に死屍を車載して是を棄つ、棄所積みて山となす」と。
- ⑤ 後花園天皇 寛正元～寛正二年（1460～61） 大冷害と戦乱の為に起こる。
- ⑥ 後奈良天皇 天文八～九年（1539～40） 風水害、いなごの害、戦乱が原因。
- ⑦ 正親町天皇 天正十三年（1585）
- ⑧ 明正天皇 寛永十七～十九年（1640～42） 冷害による。
- ⑨ 霊元天皇 延宝八～天和二年（1680～82） 異常気象が続いた為。
- ⑩ 東山天皇 元禄八～九年（1695～96） 冷害の為。
- ⑪ 東山天皇 元禄十四～十六年（1701～03） 冷害の為。特に東北地方が大飢饉。
- ⑫ 中御門天皇 享保十七年（1732）「享保の大飢饉」徳川八代将軍、吉宗の時代にウンカの大発生により起こった大飢饉である。中国・四国と九州一帯に大被害を与えたのである。餓死者は、『徳川実紀』によれば969,900人。尚、『飢饉通考』には「明年春迄餓死する者十六万九千余人」と記されている。
- ⑬ 桃園天皇 宝暦五～宝暦六年（1775～76） 東北は冷害、四国ではいなご害により起こった飢饉。
- ⑭ 光格天皇 天明二～天明七年（1782～89） 江戸時代最大の飢饉と言われる「天明の大飢饉」 浅間山の大爆発による気象の異常で起こった。その惨状は多くの記録が残されているが杉田玄白の『後見草』には「然ありしにより元より貧き者共は生産の手だてなく、父子兄弟を見棄ては我一にと他領にでさまよひ嘆き食を乞ふ。されど行先ざきも同飢饉の折からなれば、他郷の人には目もかけず、一飯あたふる人もなく、日びに千人、二千人流民共に餓死せし由…飢饉の後はいつとても疫癘必行はるとかや。今年も又其如く此病災にかかりては死亡する者多かりき<sup>(30)</sup>」と飢饉後の悪疫流行にもふれている。この飢饉による死者数は不正確ではあるが、1780年に比して1786年には1,119,159人も人口が減少している。なお、この飢饉では、数多くの人肉食が記録されたことも特筆すべきである。
- ⑮ 仁孝天皇 天保四～十年（1833～39） 江戸三大飢饉の一つ「天保の大飢饉」江戸時代の末期に近く、全国的規模で起こった。この飢饉の原因は、まず気候不順にはじまり、ついでイナゴの害と地震、それに幕末の混乱による食糧政策の貧困が拍車をかけた複合型飢饉であった。この飢饉の死者は流行病死をあわせ全国で20万から30万人と推定されている。
- ⑯ 孝明天皇 慶応二年（1866） 冷夏、冷害により特に奥羽地方で飢饉が発生し、

幕府崩壊の原因となった。

江戸の三大飢饉に関しては多くの記録が残されている。ここで若干、この三大飢饉に触れておきたい。その一つ享保飢饉は、八代将軍吉宗の享保17年（1732）に起こった。吉宗は“米将軍”と呼ばれ、“八木将軍”とあだ名されるほど米価対策に力をいれた。しかし、享保16年の冬に始まり翌年の春に異常気象は酷くなって行く。5・6月まで長雨は昼夜を問わず降り続き、肌寒い日が続いた。そして、7・8月になると近江・伊勢から、西日本一帯にウンカが大発生する。『月堂見聞集』に「当年は、風雨時を得、五穀豊年の処、西国表の国々、稲虫にウンカといふ虫生じ、次第次第に隣国へ移り、五畿内近所迄参り候、其虫後には形大に成り候、こがね虫の様に成り候、西国表方言此虫を実盛と申し候、甲冑を帯したる形にて羽あり、一夜の間に数万石の稲を喰べ候由<sup>(31)</sup>」と書かれ、明るかった青空が真昼というのに、見る見るうちにまっ暗になるほどの大群が田畑に襲いかかり、作物は根こそぎ食い荒らされた。農民たちは「飢饉がくるぞ」と叫んだ。米価は高騰し吉宗は米商人に買い占めた米を安く売らせたり、幕府の米蔵から米を放出して貧民の救済を図った。永年の幕府の経済政策の矛盾がここで破綻し、吉宗の苦心の対策も功を奏さず、失意のうちに将軍の座を降りる。この飢饉は筑前でも最も悲惨なもので、飢人が農村部からも福岡・博多に入って餓死する者が多く、その霊を弔うために博多川畔（中州2丁目）などに飢人（うえびと）地蔵が建立された。この種の地蔵は、この他にも大博町、千代町その他市内数カ所にもある。この飢饉の直接の原因は異常気象で害虫が大発生したことによる“天災”であったが、幕府の経済政策の矛盾と、飢饉が起こるといふ異常心理によるパニックで、米価があがるという噂が噂を呼んでそれが現実に米価の高騰を招くことになり被害を大きくしたのである。このことは、1973年の石油危機でトイレットペーパーを求めて狂奔した日本人の姿とオーバーラップするのである。この飢饉の被害、特に人口減少の実数を知ることは困難だが『徳川実記』によると餓死者は969,900人となっている<sup>(32)</sup>。

江戸三大飢饉のなかでも最大の飢饉と言われるのが天明飢饉である。この飢饉発生の最大の原因は信州・上野にまたがる浅間山の大噴火にあった。この噴火は、上野国（群馬県）碓氷郡姥島村の某老人が浅間山の麓から急に多くの硫黄が吹出す異常現象をみて「浅間山の噴煙は、多量に激しく空を覆い、この小山も今はほとんど硫黄山と化し、草木が皆枯死するとは、やはりタダ事ではない。浅間山に最近、天地の“火気”が集ったようだ。全山の火気は強く、常よりも百倍以上かと思われる。亡き父の教訓に、山近く住む時の心得として、つぎのように話された。異変の前兆は、まず全山の草木が枯れ始め、大地は震動し、全山は雷鳴し始める。山の大小の木がすべて枯れる

とは何か理由があるはずだ<sup>(33)</sup>」と語っている。『後見草』で「彼翁は他国へ居をうつし親しき者にも此事を言伝へけれども、土民多く疑ひ信ぜずして是用ひず後におもひ当たりしとかや<sup>(34)</sup>。」と老人の予言を伝えている。

さて、天明3年(1783)7月8日(新暦8月2日)、午前11時頃のことである。ドーン、という爆発音が周辺の村々に響き渡った。真っ赤な溶岩が吹出し、麓の鎌原村に襲いかかった。爆発から14~15分で村は泥流に埋め尽くされた。村民597人のうち、466人が瞬時に命を奪われたのである。前兆は4月頃に始まったが、遂に7月8日の大破局を迎えたのである。火山灰は風に乗って日本の各地へ流れ、2か月後までその状態は続いた。この年、アイスランドのラキ火山も6月8日に爆発している。この同年に起こった両火山の噴火は多くの火山灰の他に、大量の微粒子を成層圏まで吹き上げた。一般に、半径0.1~2 $\mu$ の微粒子は2年~10年(平均3年)かかって沈降すると言われる。インドネシアのクラカトウ火山の1883年の大噴火では、年平均日射量が20%減少した。気温の低下は0.5 $^{\circ}$ Cと考えられている<sup>(35)</sup>。両火山による気温低下は不明であるが、農作物にかなりの被害を与えたことは言うまでもない。しかし、『農諭』で鈴木武助は、天明2年の12月は暖かく、菜種の花が咲きそろい、3月頃の陽気であったが、3年の春は寒気甚だしく、連日降雨があり、寒さは田植えの頃まで続いたと記しており<sup>(36)</sup>、噴火前から飢饉の予兆はあったようである。天明3年に続き4年~6年まで飢饉は続いたが、その惨状についてはあまりにも記録が多い。

三大飢饉の最後は天保飢饉で、幕藩体制の危機が叫ばれ始めた天保4年(1833年)から天保10年(1839年)まで全国規模の大飢饉が起こる。この飢饉の主要な原因は、蝗害と、長雨、日照り、地震、それに幕府・各藩の食糧政策の貧困が拍車をかけた典型的な複合災害であったと言われている。この飢饉でも飢餓死のほか、流行病による死者が加わり全国で20万から30万人の死者がでたものと推定されている。

江戸三大飢饉を通じてみられた飢饉による人口の減少は表1に示すとおりである。1726年から1846年にかけての120年間の人口増加率は、1.3%程度に過ぎない。表2は、天明・天保飢饉による地域別死者数を示したものである。明和8年から明治3年にかけての100年間の総死亡者数(M)から得られた年平均死亡者数(Mm)と天明2年から6年にかけての天明飢饉の年平均死亡率(Tm)、天保3年から12年にかけての天保飢饉の年平均死亡率(Th)をもとに、天明の被害率( $100 \times Tm/Mm$ )と天保の被害率( $100 \times Th/Mm$ )を算出したものを図1に示した。これを見ると天明の被害は東北地方の北東部を中心として太平洋側に集中していることがわかる。天保の飢饉の場合も東北、それも太平洋側に高いことは共通するが、東北の日本海側や山陰地方の一部でも若干高い地方が認められる。また、月別死亡状況をもとに月別死亡者数の推移を図

飢饉の歴史地理学的研究

表1 “どれくらい” 飢饉で人口は減少をきたしたか

年号	西暦	男	女	計	指数	引用書
享保6年頃	1721年頃			26,065,425 <sup>人</sup>	98.17%	小
同 11	1726			26,548,998	100.00	吹, 小
同 17 (備考1)	1732	14,407,107	12,514,709	26,921,816	101.02	吹, 小
延享元 (備考2)	1744			26,153,450	98.51	官, 小
寛延3 (備考3)	1750	13,818,654	12,099,176	25,917,830	97.24	官, 吹, 小
宝暦6	1756	13,833,311	12,228,919	26,061,830	98.16	官, 小
同 12	1762	13,785,400	12,136,058	25,921,458	97.25	吹
明和5	1768			26,252,057	98.88	吹
安永3	1774			25,990,451	97.21	吹
同 9	1780			26,010,600	97.57	吹
天明6	1786			25,086,466	94.49	吹
寛政4	1792			24,891,441	93.71	吹, 小
同 10	1798			25,471,033	95.93	吹, 小
文化元	1804			25,517,729	96.11	小
同 13 (備考4)	1816	13,427,249	12,194,708	25,621,957	96.50	小
文政11 (備考5)	1828	14,160,736	13,040,064	27,201,400	102.45	小
天保5	1834			27,063,907	101.93	小
弘化3 (備考6)	1846	13,053,582	13,053,582	26,907,625	101.35	吹

(注) 引用書中吹は『吹塵録第五冊』, 小は小宮山綏介氏『近代の人口竝人口と天時との関係』, 官は『官中秘策第一巻』の略称である。(本庄栄治郎『経済史研究』による)

備考

1. 『吹塵録』2頁及び7頁には5歳以上人別なりという。
2. 横山氏『本朝古来戸口考』学芸志林第五巻171頁には25,682,220人とある。
3. 横山氏『前掲書』172頁には「この外に蝦夷松前の人口21,807人あり」, 鈴木券太郎氏「寛延三年御国人口表」(東京経済雑誌125号1090頁以下)には男女総計25,935,711人とし, 蝦夷松前男女計21,807人を含むという。
4. 『吹塵録』8頁以下, 及び横山氏『前掲書』174頁は, 共に文化元年の人口数として之を掲げている(松前函館蝦夷の人口を含む)。今は小宮山氏前掲821頁に拠る。
5. 男女別は井上氏『大日本国古来人口考』(統計学雑誌, 第19巻, 213号30頁)による。なお同氏は, 嘉永5年人口数とし本年と同一の数を掲げている。ここでは採らない。
6. 松前蝦夷人口を含む(『吹塵録』30頁)。(中島陽一郎) p. 23

示したものが図2である。この図から天明飢饉の月別死亡者数のピークは天明4年の1月前後にみられるのに対して, 天保飢饉の場合は, 同程度のピークが長期にわたり繰り返していることがわかる<sup>(37)</sup>。さらに, 図3の戸数減少率の分布から天明飢饉の被害が東北地方の北部の村々に壊滅的打撃を与えたことが推測できる。

次に, 死者の性比を八戸藩の平野部の青岩寺, 陸奥北東部の長福寺・長泉寺の資料で示したのが表3である。男女別では男, 年齢別では壮年層で死亡者が多いことがわかる<sup>(38)</sup>。天明飢饉の惨状は, 天明6年の春, 京から弟子と共に東北を旅した橋南谿の『東西遊記』に記されている。彼等一行は碓が関(青森県)に泊るが, 宿の主人の「此

表 2 地域別年間死亡者指数 (年平均を100)

年	地 域	秋 酒 新 高 敦 米 上 高	弘	七 戸 八 戸	一 花 一	久 宮 大	石 荒 小 平	関 浦 東
		田 田 瀧 田 賀 子 田 山	前	戸 戸 (含む十和田)	戸 卷 (石鳥谷)	関 (含む大原)	慈 古 渡 (含む高田)	卷 浜 浜 瀧
1782 天明 2		63 66 82 75 65 76 54	53	87 115 80 93	73 79 65	59 158 63		93
3		63 109 135 150 63 92 103	188	428 55 451 112	160 142 67	59 213 94		108
4		156 155 194 219 244 170 137	765	1,094 605 590 385	950 623 211	624 1,240 213		120
5		89 57 71 161 57 83 89	32	78 85 40 15	20 72 47	35 76 94		96
6		99 39 71 100 45 65 67	24	6 45 55 29	19 51 68	24 29 50		114
平 均		94 85 111 141 95 98 90	279	339 181 182 127	244 193 92	160 343 103		106
1832 天保 3		130 97 141 94 75 174 124 112	95	89 105 119 97	115 123 111	83 145 200 135	89 100 91	
3 4		78 127 150 100 78 134 75 80	107	66 100 117 87	95 149 125	89 103 69 129	86 89 80	
4 5		268 230 180 159 86 132 129 159	152	118 160 281 151	120 165 168	200 118 81 100	94 78 102	
5 6		72 94 127 135 86 107 94 112	63	91 145 106 111	103 88 165	79 71 81 129	138 56 93	
6 7		77 83 75 82 69 95 106 114	55	143 115 153 140	121 140 140	225 68 125 110	67 156 102	
7 8		122 104 96 312 208 482 203 397	214	305 235 394 522	314 428 405	534 758 319 262	196 94 147	
8 9		150 185 96 88 89 124 194 142	107	398 315 150 131	273 186 113	81 50 178 108	51 56 90	
9 10		97 78 71 106 78 110 84 69	127	233 230 86 87	206 161 86	70 37 44 54	89 39 67	
1840 11		118 104 80 147 69 66 83 82	64	156 70 64 45	44 77 54	26 32 88 135	63 78 74	
1 12		83 77 102 88 139 69 86 90	37	48 65 83 73	48 77 58	47 34 69 65	103 50 98	
平 均		120 118 112 131 98 149 117 136	134	166 154 155 144	141 159 142	147 142 121 123	93 79 94	

(菊池万雄) p. 78

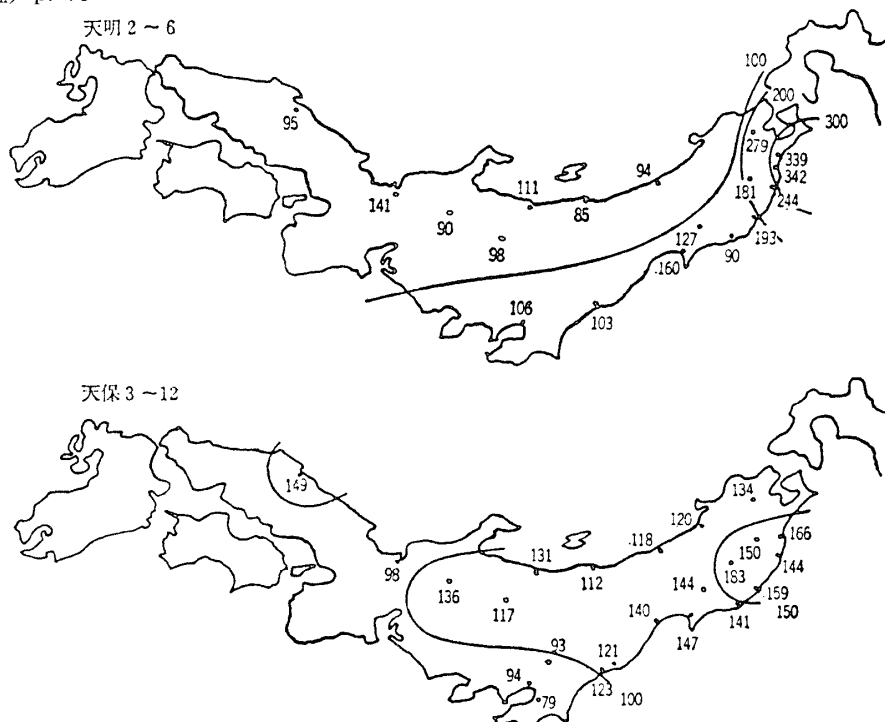


図 1 飢饉年における死亡率分布 (菊池万雄) p. 79



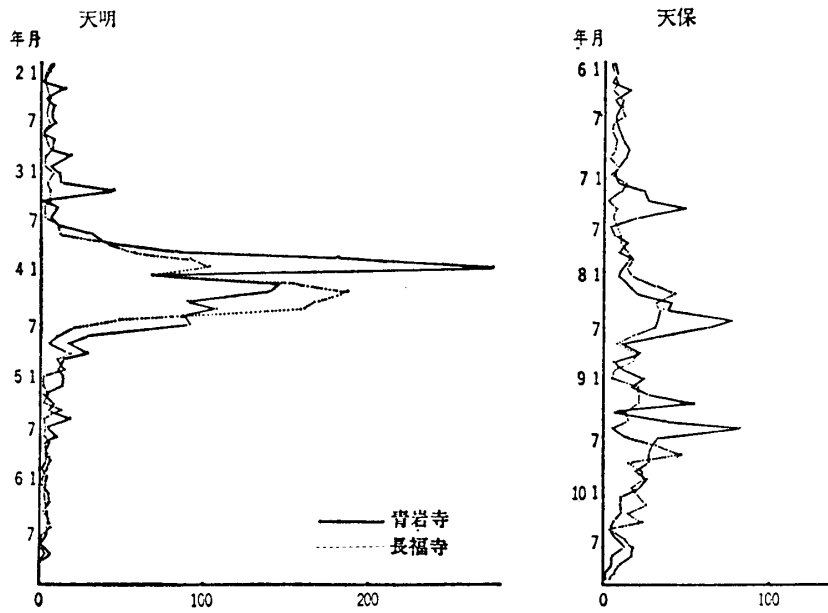


図2 飢饉年の月別死亡者推移 (菊池万雄) p. 79

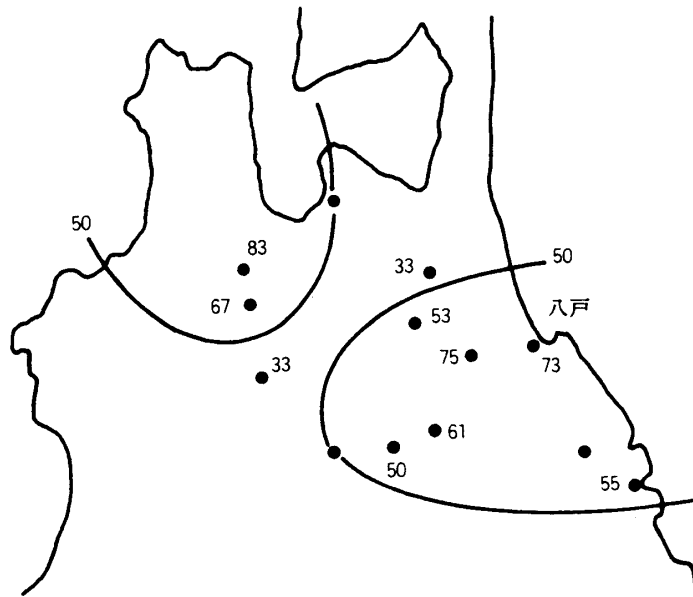


図3 天明飢饉による戸数減少率分布  
(北行日記より作成) (菊池万雄) p. 72

所は三百軒の所なるが、大かた餓死して人の活き残りて煙を立る家は、今纔かに八十軒にして、其中に男子は多く死して、今に活残れるは大かた女ばかり也。男女配合して見るに男壹人に女四人半に当る<sup>(39)</sup>」更に「津軽にて…其時餓死せるは男子最多し、十人のものなれば男七八人死して女は纔壹貳人死せり<sup>(40)</sup>」と同様のことを明らかに示している。これらは、第二次大戦後の我が国の食糧危機の際に男子に栄養失調が多かったことを思い起こさせる。この他に被害を大きくしたのは米価の異常な高騰によって庶民が食糧を購入できなかったことである (図4)。

表 3 男女別・幼壮年別死亡状況（上欄は実数，下欄は構成比）

年	寺				長 福 寺			
	男	女	幼 男	幼 女	男	女	幼 男	幼 女
天明3年10月	7	13	—	—	10	18	2	3
11	30	13	1	—	30	16	7	1
12	56	37	3	1	59	25	—	3
4. 1	72	58	11	7	49	39	7	3
閏	18	15	2	1	29	23	7	5
2	36	32	1	9	64	57	15	9
3	39	30	2	4	87	69	15	6
4	24	23	1	—	62	79	7	10
5	30	22	4	2	68	67	9	8
6	26	16	2	3	18	23	4	1
10ヶ月計	338	259	27	27	476	416	73	49
10	2.1	5.0	—	—	2.9	4.3	2.7	6.1
11	8.9	5.0	3.4	—	6.3	3.8	9.6	2.0
12	16.6	14.3	11.1	3.7	12.3	6.0	—	6.1
4. 1	21.3	22.4	40.7	25.9	10.2	9.4	9.6	6.1
閏	5.3	5.8	7.4	3.7	6.0	5.5	9.6	10.2
2	10.7	12.4	3.4	33.3	13.3	13.7	20.5	18.4
3	11.5	11.6	7.4	14.8	18.1	16.6	20.5	12.2
4	7.1	8.9	3.4	—	12.9	19.0	9.6	20.4
5	8.9	8.5	18.8	7.4	14.2	16.1	12.3	16.3
6	7.7	6.2	7.4	11.1	3.8	5.5	5.5	2.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

年	寺				3 カ 寺 計			
	男	女	幼 男	幼 女	男	女	幼 男	幼 女
天明3年10月	14	9	—	—	31	40	2	3
11	14	9	1	—	74	38	9	1
12	27	4	—	1	142	66	3	5
4. 1	76	53	6	3	159	125	21	12
閏	—	—	—	—	85	63	12	7
2	49	50	3	2	149	139	19	20
3	41	49	3	—	167	148	20	10
4	61	64	1	2	147	166	9	12
5	29	34	2	1	127	123	15	11
6	13	10	—	—	57	49	6	4
10ヵ月計	324	282	16	9	1,138	957	116	85
10	4.3	3.2	—	—	2.7	4.2	1.7	3.5
11	4.3	3.2	6.3	—	6.5	4.0	7.8	1.2
12	8.3	1.4	—	11.1	12.5	6.9	2.6	5.9
4. 1	23.5	18.8	37.5	33.3	14.0	13.1	18.1	14.1
閏	—	—	—	—	7.5	6.6	10.3	8.2
2	15.1	17.7	18.8	22.2	13.1	14.5	16.4	23.5
3	12.7	17.4	18.8	—	14.7	15.5	17.2	11.8
4	18.8	22.7	6.3	22.2	12.9	17.3	7.8	14.1
5	9.0	12.1	12.5	11.1	11.2	12.9	12.9	12.9
6	4.0	3.5	—	—	5.0	5.1	5.2	4.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

（菊池万雄）p. 80

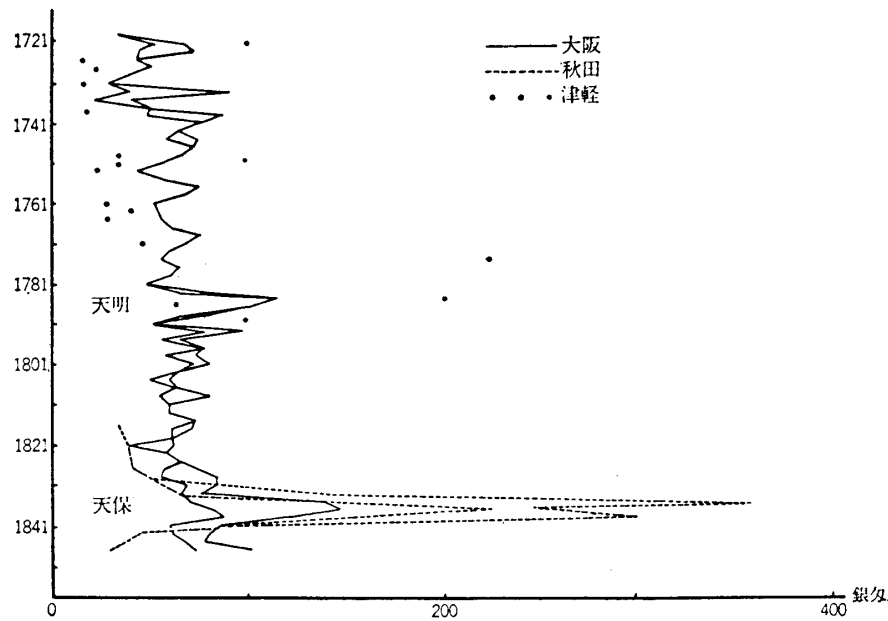


図4 米価変動にみる飢饉 (菊池万雄) p. 61

天明、天保飢饉に関する研究は多いが、これまでと視点をかえた研究として菊池勇夫の『飢饉の社会史』が注目される。このなかで飢饉の地域性について触れ、東日本は異常低温、日照不足が原因となる冷害型を示すのに対して、西日本は旱魃、虫害、あるいは台風による風水害に特徴があると述べている。そして、我が国の飢饉のプロセスについても一定のパターンがあり、まず、凶作で一揆・騒動がおこる。そこで地逃げ・非人化し強盗の頻発・餓死者の発生、さらに疫病の流行による大量死が起こる<sup>(41)</sup>、と述べている。

いま一つ、興味ある研究として北原糸子の『都市と貧困の歴史—江戸から東京へ』があげられる。江戸時代には、「貧乏な人間を助けるのは金持ちの当然の義務」だという民衆の観念があり、飢饉などで困窮した人々は、金持ちの町人から堂々と食べ物やお金を貰っており、これを施行と呼んだ。そして、施行をしなかったり、ドサクサに紛れて不当な値上げをする商人は、酷い人間として、打ち壊しにあったという。飢饉の際に生じた米騒動や民衆による商店の襲撃、掠奪や焼打ちなどは無制限に行われたのではなかったのである。この施行は、まさにイスラム教徒の喜捨（ザカート）の義務、つまり富者が貧者を助けることは大切な務めであると言うことで、“喜捨の用途は、まず貧者に困窮者、それを徴集して廻る人、心を協調させた人、奴隷の身受け、負債で困っている人、それにアッラーの道、旅人、これだけに限る（コーラン第9章60）<sup>(42)</sup>”と同質のものであったといえる。明治以降の近代化の過程で「貧乏するのは自らが悪いからだ、怠けたからだ。働け！働け！」と貧困を恥ずべきこととする個人主義的風潮が生まれ、勤勉な日本人を脅迫的に創り上げていったというのである。

明治以降はこれまでのように大飢饉は起こらないようになった。しかし、局地的には頻発しており、特に山村では飢饉の恐怖は大きかったようである。例えば長野・新潟県境の秋山郷では19世紀末まで飢饉に見舞われていた。明治20年には山の草がなくなるまで、その根を掘って食べたという。さらに明治26年から連続した不作は、30年には収穫皆無となり、栃・ナラの実も成熟せず、蓄積した穀物も全くなり、わずかの糠粕に草木の根草を混ぜて団子にして飢えをたえしのんだ。そのうえ赤痢とハシカが流行して死者が出た。その後この惨状が長野県当局に報告され、やっと救助策がとられたのである。また、大正2年、4年、昭和20年、21年にも大凶冷に見舞われ、21年には草の根まで食べて飢えをしのいだという<sup>(43)</sup>。

〔飢饉の原因〕 中島は飢饉の原因を“天災”と“人災”に分け、567年から1975年にかけての飢饉の全発生件数のうち、天災では早魃が23.7%、水害18.8%（洪水13.0%、長雨5.8%）、風害7.0%、地震3.0%、虫・鼠の害2.8%、冷害2.2%、津波が0.8%を占め、人災では流行病が10.0%、地域エゴ6.0%、戦争が5.0%を占めるとしている。また双方を含むその他（噴火、火災、交通杜絶、原因不明を含む）は、20.7%となっている。この数字について中島は、資料の散逸と記載洩れも多少はあるとみており、それがこの分類における人災の少なさに反映したと考えている<sup>(44)</sup>。

図5は、我が国の飢饉を原因別とその規模別に整理したものである。飢饉の原因のうち、天災では特に重要なものが気象異常である。これは我が国だけでなく世界的規模の一環であることも多いようである。その一つが“小氷期”と呼ばれる気候変動で、およそ1430年頃から1850年頃にかけて北半球の大部分に生じた今より寒冷な気候である。ただその時期については研究者により差がある。その極相は地域的にずれがあり、概して北半球で早く南半球では遅れる傾向がある（図6）。この小氷期はしばしば顕著な気候悪化を伴いながら2～3世紀にわたって気候が揺れ動いた時代であった。これは、我が国では、室町時代から江戸時代末期の第12代将軍徳川家慶の頃までの時期に該当する。諏訪湖の結氷日記録によれば、室町時代1400年代の前半には著しく早い結氷日が集中する。伏見宮貞成親王が京の南郊伏見での生活のなかで書き留めた日記『看聞御記』の降雪の記述からも1400年代の初頭から中期に向かって寒冷化したことをうかがうことができる<sup>(45)</sup>。これ以降の低温期のなかで、我が国の歴史は、15世紀中ごろから16世紀初頭の気温の悪化による農業生産の低下が農民を窮乏化させたことを原動力として起こったと考えられる“土一揆”の頻発する暗黒時代から次第に気温が上昇するにつれて安土・桃山の豪華絢爛期を迎えたのである。しかし、江戸時代に入って1610年から1880年頃に再び気候悪化が続いた。『日本災異志』にあげられた北海道を除く全国の洪水と霖雨の記述を50年毎に集計した表4でも、18世紀後半から19世

飢饉の歴史地理学的研究

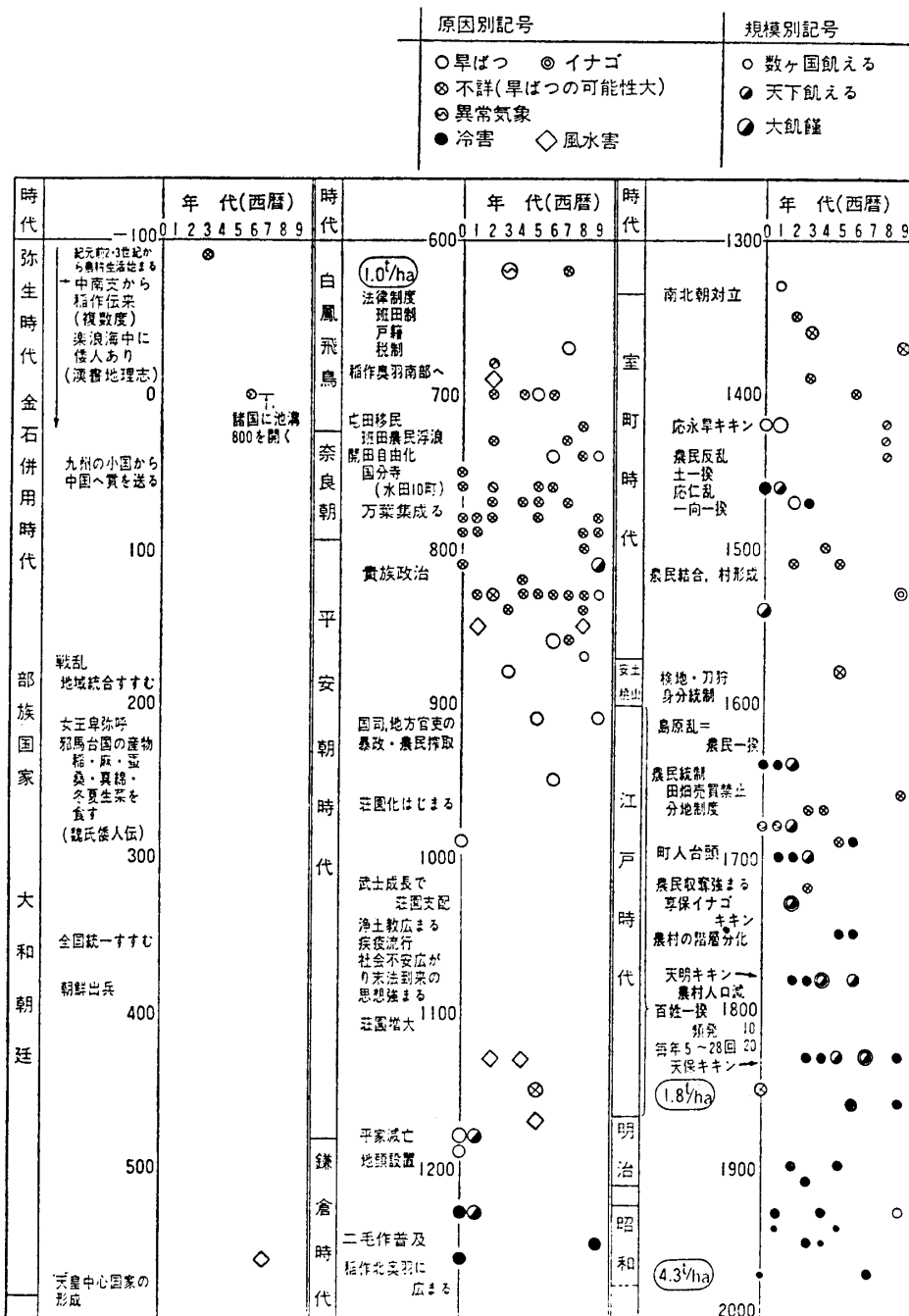


図5 稲作歴史と飢饉の記録 (飢饉通考などから作図) 高橋編『気候変動と食料』p. 179

紀前半にピークがあったことがわかる。

18世紀後半から19世紀前半の近世小氷期は、島国でかつ鎖国という閉鎖社会の主産業であった水稻栽培にどのように影響を与えたのであろうか。表5は『岩手県災異年表』から4分の1世紀毎に気候の推移を示したものである。これを見ると1801~1825年に気候の回復期があったことがわかるが、この時期は全国の農村のやや安定した時期にあたっている。しかし、この後に気温が低下し、天保飢饉が江戸時代最後の大飢饉として起こったのである。

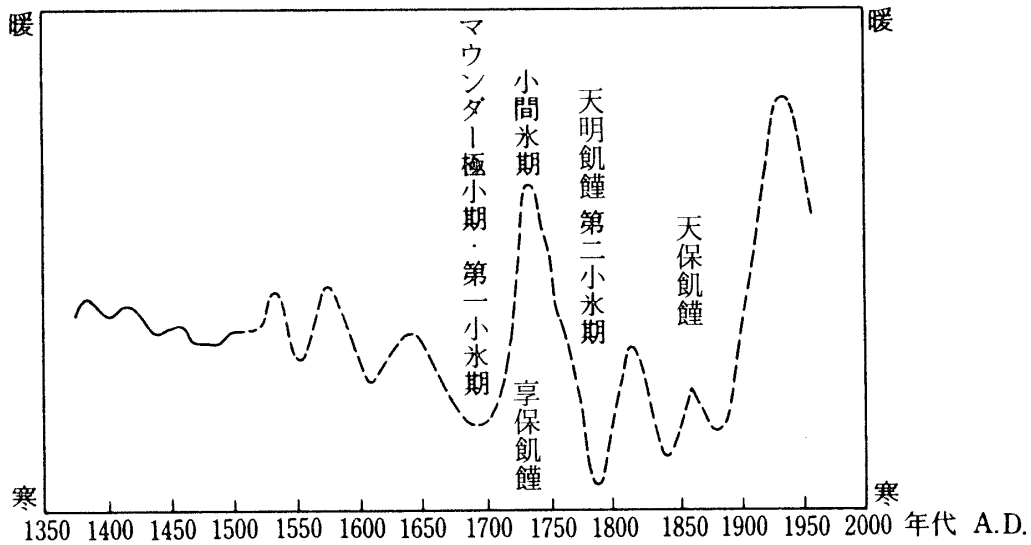


図6 ナラの年輪の酸素同位体比測値から推定された1350年から1950年間の気候変動の傾向 (Libby 1983)<sup>3)</sup> (安田喜善) p. 302

表4 『日本災異志』の洪水数，霖雨数の半世紀ごとの変遷

期 間	全国洪水数	全国霖雨数
1601～1650年 (n=50)	31	5
1651～1700年 (n=50)	34	4
1701～1750年 (n=50)	34	5
1751～1800年 (n=50)	47	7
1801～1850年 (n=50)	38	6
1851～1883年 (n=33)	16	3

(山本武夫) p. 86

表5 1751～1850年の小氷期期間の気候の推移

期間 \ 気候	霖 雨	降霜 (雹)	洪 水	飢 饉	凶不作
1751～1775年	6	7	10	2 (1)	10
1776～1800年	12	7	16	9 (1)	13
1801～1825年	3	3	9	1 (0)	6
1826～1850年	6	11	10	4 (1)	8

[注] ( ) は大飢饉の数。(山本武夫) p.92

小氷期は、気温の低下のもとで霖雨が多発することが多い。特に東北地方の太平洋岸は“やませ”が原因で冷害が起こることが多い。オホーツク海高気圧が発達するとき北東風として吹送してくる冷湿な風で、6～7月頃に多く現れ、年によっては8月にまで及ぶこともある。この風が吹出すと青森県や岩手県の海岸部では気温が数度も下がり、霧や霖雨を伴うことも多く、これが長期にわたると冷害の原因となった。東北地方に水稻栽培が次第に広がるに伴って、元来、熱帯性作物である稲を品種改良や農

業技術の改善で栽培範囲を広げたものだけに低温の被害が大きくなったのである。岩手県の宮古气象台の95年分のデータから冷害の型は、生育の前期に起こる「遅延型冷害」と出穂開花期に低温で受精を妨げる「障害型冷害」それにこの二つが併発する「混合型冷害」に分類される(図7)。ここで、気象と被害の関係を確率論的に考えてみたい。明治以前の農業技術では、7、8月の平均気温が19℃以下の場合、水稻の豊熟が半作以下の壊滅的被害を受けるという経験から、図8に7・8月の平均気温の頻度曲線を描き、正規分布の理論曲線をもとに計算値と実測値とを比較すると両者はほぼ一致していると言うことができる。これをもとに宮古の7・8月の平均気温が19.5℃以下、19.0℃以下、18.5℃以下、18.0℃以下の出現確率を求めたのが表6である。これを見ると、栽培の極限地域では僅かな気温変化も大被害の原因となることが推察でき

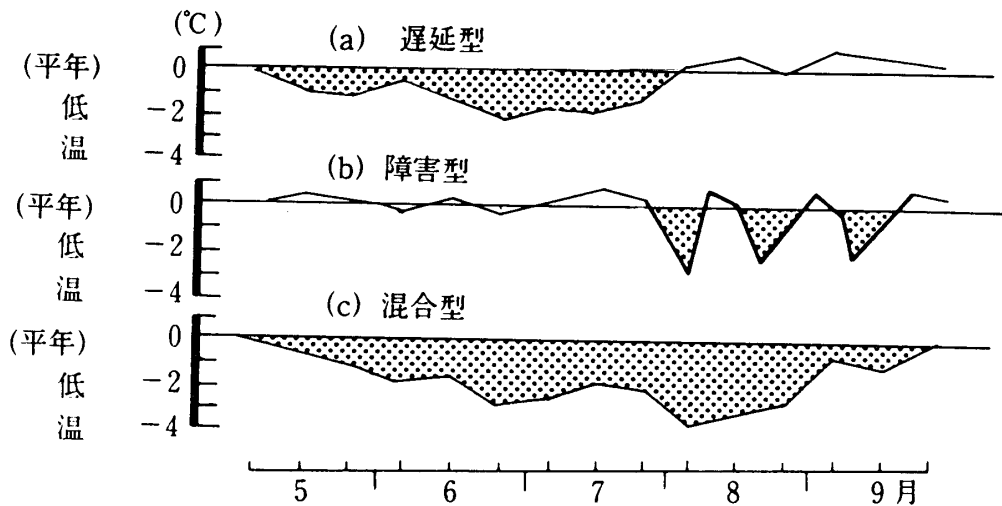


図7 冷害の三つの型の気温経過(模式図)  
(坪井八十二:1976)(朝倉正編) p. 101

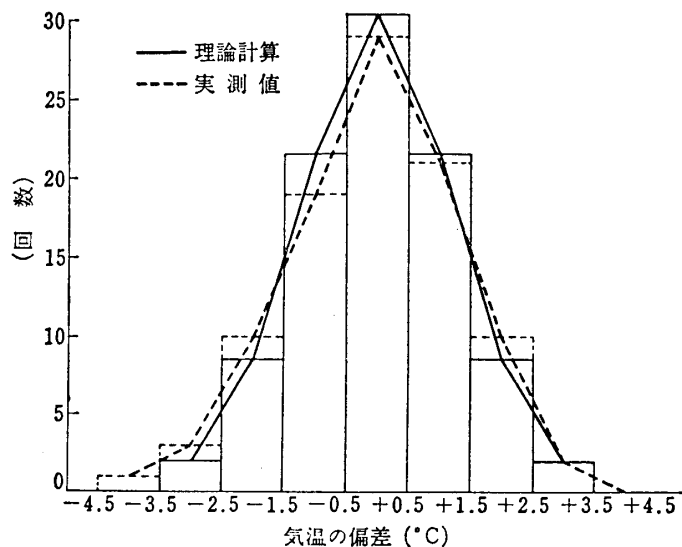


図8 宮古7月、8月平均気温の度数分布  
(1883~1977年, n=95)(山本武夫) p. 107

表 6 宮古 7 月, 8 月平均気温の低温出現確率

(a) 現代 (1883~1977 年, n=95) 期間

低温限界	出現確率	n=95年の出現確率回数	n=95年の実際の出現回数
19.5°C以下	7.54%	7.2回	6回
19.0°C以下	3.33	3.2	4
18.5°C以下	1.27	1.2	2
18.0°C以下	0.46	0.4	1

(b) 小氷期気候, 平均気温の現代との差

(A) 1°C (B) 1.5°C (C) 2.0°Cの場合

平均気温の差 低温限界	(A) $\Delta\theta = -1^\circ\text{C}$	(B) $\Delta\theta = -1.5^\circ\text{C}$	(C) $\Delta\theta = -2.0^\circ\text{C}$
19.0°C以下	14.94%	26.15%	40.54%
18.5°C以下	7.54	14.94	26.15
18.0°C以下	3.33	7.54	14.94

(c) 小高温期気候, 平均気温の現代との差

(A') 1°C (B') 1.5°C (C') 2.0°Cの場合

平均気温の差 低温限界	(A') $\Delta\theta = +1^\circ\text{C}$	(B') $\Delta\theta = +1.5^\circ\text{C}$	(C') $\Delta\theta = +2.0^\circ\text{C}$
19.5°C以下	1.27%	0.42%	0.12%
19.0°C以下	0.42	0.12	0.03
18.5°C以下	0.12	0.03	0.01

(山本武夫) p. 108

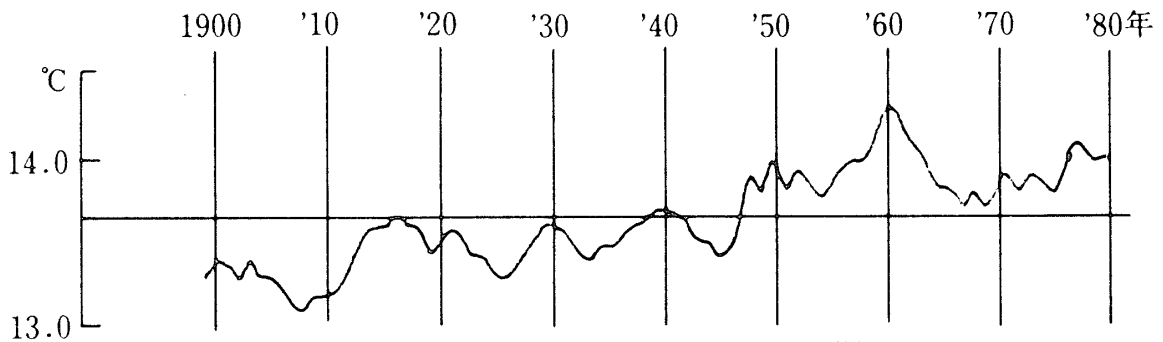


図 9 日本の年平均気温の経年変化 (5 年移動平均)

全国23地点の平均。

地点名：網走・根室・寿都・宮古・山形・石巻・金沢・長野・前橋・熊谷・水戸・浜松・境・浜田・彦根・和歌山・巖原・熊本・宮崎・多度津・高知・名瀬・石垣島 (朝倉正編) p. 162



る<sup>(46)</sup>。

明治以降は農業技術も進歩したが、気象の影響は避けることはできない。図9は年平均気温の経年変化を示したものであるが、冷夏や早魃、長雨のたびに生産量は減収の危険にさらされている。水稻の10アール当たりの収量は、明治期の約200kgから、現在の約500kgと2.5倍に増加したが年変異は依然として大きい。その主な原因としては冷害と台風があげられる。この100年間で冷害は25回、台風による大災害は1921、1951年の2回、冷害と台風のダブル被害は1934、1935、1945、1953、1956年の5回が数えられる。この期間に冷害はほぼ4年に1回起り、この間は冷害の多発期と言われる。図10は水稻の作況指数の変動を示したものであるが、北海道と岩手県の変動率が大きいことがわかる。これは、冷害が不作の最大の原因であることを示している。いわゆる冷害とは、夏の低温により作物の生育が悪く、収量が減収することで、その被害は水稻だけでなく、野菜や果樹など夏に生育する作物にも広く発生する。国土が南北に長いため、被害の地域差も大きく、北海道が冷害の年があれば、東北地方だけが冷害である場合もある。さらに西日本までもが冷害の年もある。同じ東北地方でも太平洋側はやませの影響を受けて冷害の被害をうけるものの、日本海側は豊作となることもある。他面、耐寒性品種の育成、育苗方法の改良、施肥や水管理法など冷害の防止に対する技術も進歩しており、その技術の水準や採用の有無が地域差に多様性を

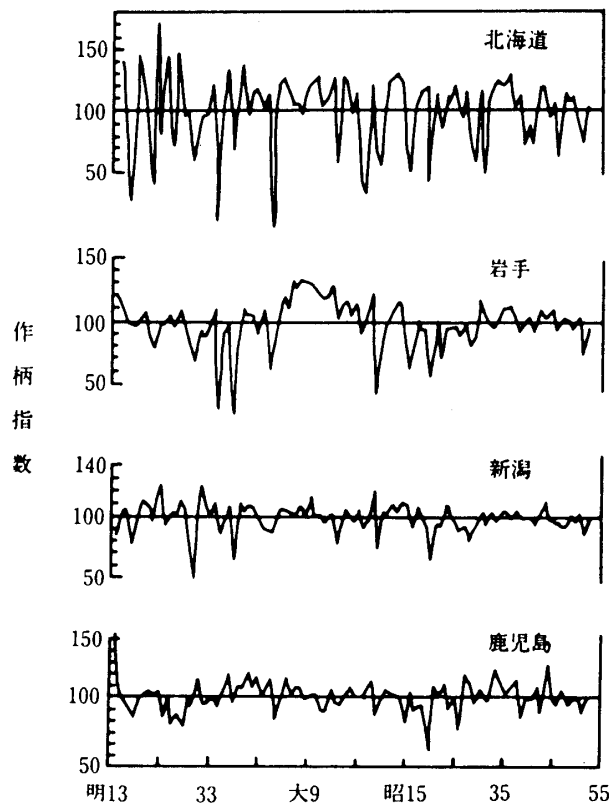


図10 水稻の作況指数の年次変動 (内嶋善兵衛：1981)

表 7 干ばつの記録年表

年 月	地 域	程 度	備 考
明治33年 (1900) 5~7月	北九州, 山陰		干天
" 36年 (1903) 7~9月	西日本, 東海	中	7月31日~9月2日, 7mm (境)
" 37年 (1904) 7~9月	西日本, 東海	大	福岡無降水 45日間, 9月26mm (9%, 名瀬)
" 42年 (1909) 6~8月	和歌山, 愛知, 岐阜		7月中旬~8月中旬干天
大正2年 (1913) 6~8月	西日本, 東海	大	北日本冷害年, 西日本無降水30日以上続出, 6月18日~7月37mm (福岡), 7月5日~8月11日 4mm (彦根)
" 6年 (1917) 6~7月	西日本	中	春より少雨, 4月16日~5月29日57mm (福岡) 空梅雨, 7, 8月少雨 (香川), 明治26年以来
" 11年 (1922) 6~9月	西日本, 中部日本	大	5月下旬~6月下旬干天移植時期を失す (下関), 8月中旬連日35℃ (福岡)
" 12年 (1923) 5~8月	近畿, 中部日本	中	空梅雨 (奄美地方) 7月27日~8月29日 4mm (金沢)
" 13年 (1924) 6~8月	西日本, 中部日本	大	空梅雨, 土用照込み, 6~8月雨量 30% (京都, 名古屋)
" 15年 (1926) 7~8月	西日本, 中部日本	中	北海道冷害年, 8月48mm (宮崎), 16mm (浜松)
昭和2年 (1927) 5~8月	近畿, 中部日本	中	新潟5月中旬~6月中旬雨なし, 名古屋6月71mm (記録), 和歌山7, 8月干
" 3年 (1928) 7~9月	新潟, 山形		佐渡大干 (弘化3年以来)
" 4年 (1929) 5~9月	西日本, 東日本	大	広島6~8月, 降水平年比58% 7月11日~8月4日 1mm (鹿児島) 7月9日~8月3日雨なし (沼津)
" 8年 (1933) 7~8月	西日本	中	熊本降水平年比6月43%, 8月9%, 岡山被害大
" 9年 (1934) 6~8月	西日本	大	北日本冷害年, 松山5月降水38%, 6月50%, 福岡, 植付不能面積55% (7月上旬現在), 熊本8月6mm, 明治27年に次ぐ
" 14年 (1939) 5~9月	西日本, 中部日本	大	7月西日本降水平年比21%, 北陸42% 8月西日本降水平年比44%, 北陸39%
" 17年 (1942) 7~8月	全国	大	7月松本2mm, 東京9mm, 境6mm, 釜山4mm
" 18年 (1943) 7~8月	東北		相川6月19日~8月11日7mm 7月酒田・秋田1mm, 石巻3mm
" 19年 (1944) 6~8月	西日本	中	6月下旬~8月干天, 7月神戸22mm 8月佐賀41mm (25%)
" 22年 (1947) 7~8月	西日本	中	九州除く 徳島10mm, 呉22mm
" 26年 (1951) 7~8月	西日本, 中部日本	大	7月21日~8月28日干天, 松江0.3mm 広島5mm, 新潟, 長崎30mm
" 33年 (1958) 3~7月	西日本, 中部日本	大	関東, 東北3月~7月中旬, 西日本5月~7月末干天, 大分7月11mm
" 35年 (1960) 7~8月	西日本, 中部日本	中	九州7~8月少雨, 飯塚52mm 関東6~7月少雨, 熊谷6月22日~7月25日29mm
" 42年 (1967) 7~9月	九州・四国	大	大分8月3mm, 佐賀9月0mm
" 48年 (1973) 6~8月	全 国	大	中国・四国: 昭和14年以来 東北・北陸: 昭和17年以来の干天
" 53年 (1978) 5~9月	全 国	大	平戸4.5mm, 長崎24.5mm, 広島1.5mm, 姫路3.0mm (7月の総降水量)

(坪井・根本 / 異常気象と農業: 朝倉書店, 1976に追加)  
(朝倉正編) p. 207

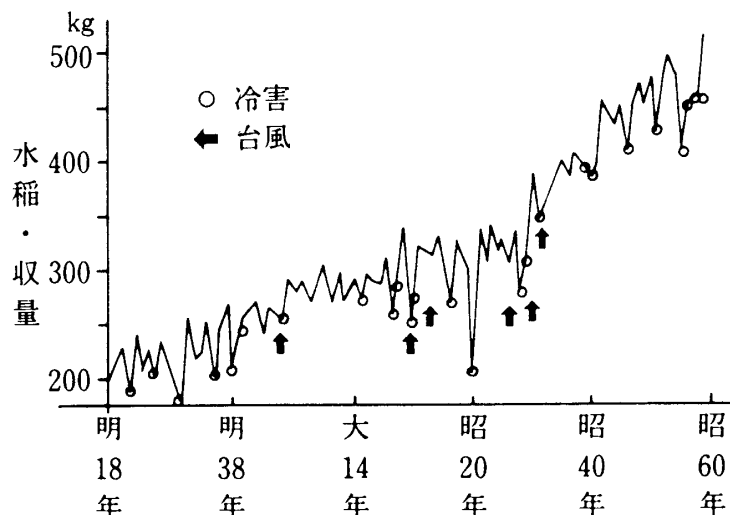


図11 水稻の10a当たりの収量 (朝倉正編) p. 99

与えている。

一方、西日本に多いとされる早魃の被害は表7に示してある。大規模な干魃だけを取りあげても6年に一回の頻度で発生している。しかし、図11に見られるように水稻の収量は、小刻みな変動は見られるものの着実に増加してきており、これが人口の増加につながっているのであろう。また、表8は、明治17年以降の東北と北海道における冷害記録年表を示しているが、これによると、北海道が平均して3年に一度は冷害の被害を受けているが、10a当たりの収穫量は、高度経済成長期以降、順調に増収傾向を見せており冷害に対する農業技術が進歩していることをうかがわせる。また表9は、昭和期の冷害発生回数を示しているが、昭和中期にやや減少していた冷害の発生回数が昭和の後期に入って再び増加する気配を見せている。

〔飢饉の周期〕 昔の人は「飢饉は凡そ30年から50年の間隔で来る」と考えていたようである。江戸時代の記録でもほぼこのことが当てはまる。図12は藤原咲平博士による日本大飢饉の81年周期説を示すものである。その手法について概略すれば、西村真琴・吉川一郎編『日本凶荒史考』記載の主要飢饉を81年ずつの間隔で印をつけると、凡そ、縦線上に並ぶことから、凶作に81年の周期があると推測したのである<sup>(47)</sup>。

〔飢饉の対策〕 「いにしへ賢王の御代に始りて、民のため諸国郡郷まで救急料とて倉を建て、穀物を蓄え、飢饉其外民の災を救はせ給ひし事皆国史に見えたり。かうやうの事も白河院の比より絶え、乱世の後には公武の衰微甚しくてかかる善政も聞えず。…さればこそ凶年に逢へば、所により小民餓死をまぬかれがたく侍れと<sup>(48)</sup>」江戸の農学者、宮崎安貞は『農業全書』で古くから飢饉対策はあったが、1086～1129年の白河上皇の頃から衰退したことを述べている。また「凡飢饉年の兆をば、智ある人は夏の中にもはや見及ぶべし<sup>(49)</sup>」と普段からの注意深い観察と知識があれば災いは避けら

表 8 冷害記録年表

(坪井八十二)

年 号	西 曆	冷 害 の 程 度		10a 当 たり 収 量 (kg)	
		東 北	北 海 道	東 北	北 海 道
明治17年	1884年	○	●	134	44
“ 21年	1888年		●	176	104
“ 22年	1889年		●	171	70
“ 24年	1891年		○	191	137
“ 26年	1893年	○	○	193	126
“ 30年	1897年	○	○	155	104
“ 35年	1902年	●	◎	126	21
“ 38年	1905年	●	○	105	123
“ 39年	1906年	○	○	211	175
“ 41年	1908年		○	221	168
大正 2 年	1913年	●	◎	139	12
“ 15年	1926年		○	274	108
昭和 6 年	1931年	○	●	251	84
“ 7 年	1932年		●	276	67
“ 9 年	1934年	●	●	178	138
“ 10年	1935年	○	●	231	118
“ 15年	1940年		●	297	162
“ 16年	1941年	●	●	246	117
“ 20年	1945年	●	●	211	105
“ 28年	1953年	○	○	302	233
“ 29年	1954年	○	●	344	177
“ 31年	1956年		●	413	150
“ 39年	1964年		●	443	264
“ 40年	1965年		○	463	334
“ 41年	1966年		●	449	283
“ 44年	1969年		○	495	351
“ 46年	1971年		●	475	273
“ 51年	1976年	○	●	464	361
“ 55年	1980年	●	●	410	385
“ 56年	1981年	●	●	448	413
“ 57年	1982年	○		508	501
“ 58年	1983年	○	●	522	355
計		19 (8) 回	31 (21) 回		

注) ○：被害軽, ●：被害大, ◎：被害激  
(朝倉正編) p. 206

表9 昭和の冷害発生回数

年代	冷害回数
昭和1~10年	4回
11~20	2
21~30	2
31~40	2
41~50	2
51~(58)	5

(朝倉正編) p. 99

れるとしている。

江戸時代の飢饉の際にも幕府や各藩でも手をこまねいて傍観していたわけではない。幕府は江戸の市民に“お救い米”として米やカネを給したり“お救い小屋”を設けたり，食糧買い占め禁止，産業開発を図るなど対策に努めたがあまり効果はあがらなかったようである。他方，各藩でも各種の対策を講じたが成功した例として，天明飢饉の際の出羽国米沢の藩主上杉鷹山の施策があげられる。彼は普段からの飢饉の備え，自らの清潔な生活態度と公正な政治で藩を指導し，天明飢饉ではきめの細かい諸政策が功を奏し藩内からは一人の餓死者も離村者もだしていない。

飢饉の対策としては，救荒作物の甘藷（さつまいも）の導入も注目される。甘藷は

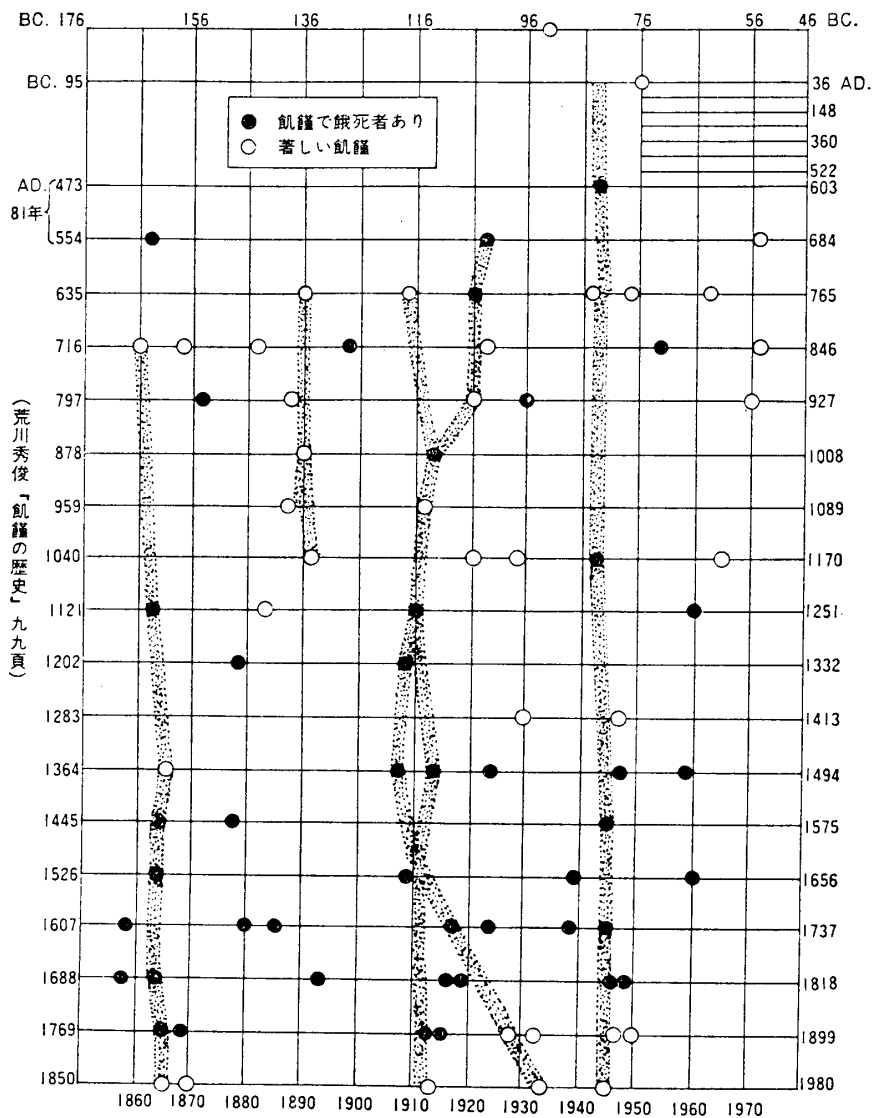


図12 藤原咲平博士の飢饉81年周期図 (中島陽一郎) p. 155

新大陸の原産であり、フィリピンから1594年に中国に入り、琉球には野国総管により福建省から慶長10年（1605）に入った。奄美諸島にも同年から寛永10年（1633）の間に伝来したと考えられている。薩摩藩には薩摩国山川の漁夫の前田利右衛門が宝永2年（1705）に琉球から持ち帰り領内に普及させたが、藩は領外への持出しを禁じた。他藩の者はこれを盗みださんと試みるが、伊予国大三島瀬戸村の下見吉十郎が密かに盗みだし苦心して故郷へ持ち帰った。そしてこの栽培を奨励したため、享保飢饉では島から餓死者はでなかったという。

甘藷と言えば青木昆陽の名が挙がるが、これは幕府の命で享保20年（1735）に『甘藷考』を書き、薩摩から種いもを取り寄せ小石川薬園に植え、これを広めたことで有名になったものである。これは享保飢饉のとき、薩摩藩の領内では餓死者をださなかったのが原因をさぐった結果、甘藷の存在を知ったことによるとされている。

（追記）

享保20年、大阪本屋仲間により出版された『仁風一覽』は、享保飢饉で飢人を救済した人びとの人名一覽である。その記載総員数は37,290人におよんでいる。うち京都・大阪の二都の施行町人の占める割合は、18,905人で、全体の50%強にあたっている<sup>(50)</sup>。

享保・天明の飢饉時には江戸で打ちこわしが起きたが、米欠乏の度合のもっとも凄まじかったとされる天保の飢饉には打ちこわしが起きていない。その理由は町会所による御救米の給付と豪商による重層的な施行が行われたことにある<sup>(51)</sup>。

（未完）

#### 参 考 文 献

- 朝倉正編（1987）：『知っておきたい異常気象』大蔵省印刷局  
 菊池勇夫（1995）：『飢饉の社会史』校倉書房  
 鈴木万雄（1982）：『図説 日本の災害』古今書院  
 北原糸子（1995）：『都市と貧困の歴史—江戸から東京へ—』吉川弘文館  
 高橋浩一郎編（1977）：『気候変動と食料』大明堂  
 中島陽一郎（1976）：『飢饉日本史』雄山閣出版  
 宮崎安貞（1936）：『農業全書』岩波文庫  
 日本古典文学大系67『日本書紀(上)』（1967）岩波書店  
     68『日本書紀(下)』（1968）岩波書店  
 新日本古典文学体系12『続日本紀(一)』（1989）岩波書店  
     13『続日本紀(二)』（1990）岩波書店  
     14『続日本紀(三)』（1992）岩波書店  
     15『続日本紀(四)』（1995）岩波書店

宇治谷孟 (1995) : 『続日本紀(下)』講談社学術文庫

注

- (1) 日本書紀(上) p. 238
- (2) 前掲(1) p. 390
- (3) 日本書紀(下) p. 126
- (4) 前掲(3) p. 208
- (5) 前掲(3) p. 212
- (6) 前掲(3) p. 212
- (7) 前掲(3) p. 424
- (8) 前掲(3) p. 453
- (9) 続日本紀(上) p. 53
- (10) 前掲(9) p. 59
- (11) 前掲(9) p. 59
- (12) 前掲(9) p. 77
- (13) 前掲(9) p. 89
- (14) 前掲(9) p. 97
- (15) 続日本紀(二) p. 232
- (16) 続日本紀(三) p. 61
- (17) 前掲(16) p. 61
- (18) 続日本紀(四) p. 73
- (19) 前掲(18) p. 77
- (20) 前掲(18) p. 81
- (21) 前掲(18) p. 85
- (22) 前掲(18) p. 117
- (23) 前掲(18) p. 125
- (24) 前掲(18) p. 153
- (25) 前掲(18) p. 235
- (26) 前掲(18) pp. 235-241
- (27) 前掲(18) pp. 453-479
- (28) 続日本紀(下) pp. 440-441
- (29) 鴨長明、市古貞次 校注(1989) : 『方丈記』岩波文庫 pp. 217-221
- (30) 立川昭二(1984) : 『病と人間の文化史』新潮社 p. 43-44
- (31) 中島陽一郎 pp. 27-28
- (32) 前掲(31) p. 41
- (33) 前掲(31) p. 48
- (34) 前掲(31) p. 48
- (35) 高橋浩一郎編 pp. 62-63
- (36) 前掲(31) p. 48
- (37) 菊池万雄 p. 78

- (38) 前掲 (37) p. 80
- (39) 橘南谿『東西遊記』 p. 263
- (40) 前掲 (39) p. 269
- (41) 菊池勇夫 p. 17
- (42) 井筒俊彦 (1957) : 『コーラン(上)』岩波文庫 pp. 269-270
- (43) 市川健夫 (1975) : 『平家の谷 秘境秋山郷』令文社 pp. 37-39
- (44) 前掲 (31) pp. 10-12
- (45) 山本武夫 pp. 95-96
- (46) 前掲 (45) pp. 108
- (47) 前掲 (31) p. 156
- (48) 宮崎安貞 p. 366
- (49) 前掲 (48) pp. 367
- (50) 北原糸子 pp. 10-11
- (51) 前掲 (50) p. 112